



⑬ 学术交流への憂い

不可能な制度設計

表玄関の“Foreign Exchange”のサインを確認し、銀行に入る。係員に日本円を換金したいと告げると、「こちらに口座はお持ちですか」。ありませんと答えれば、「では無理です、他を当たってください」。その繰り返し。

私の最初の中国留学はもう20年以上前だ。その間、中国の生活は格段に豊かに、きらびやかになった。最初の冬は、学生食堂のおかずがまだ白菜だらけ。今は辺境の地まで物流が行き渡る。昔を知っているから、今の豊かさは素直に嬉しい。

でも、この国の最近の制度設計はあちこちおかしい。外国人に不可欠な外貨兌換すら、もう簡単ではない。私は今年、大学の支援で合計6カ月間（3カ月を2回）、中国に滞在している。友人から部屋を借りたため、国内法に従い、毎入国後24時間以内に警察に出頭し、部屋の持ち主の戸籍本まで提示し、住居登録をし直す。だが銀行で換金しようとする、口座がないから換金できない、あなたのビザ（当初はなぜか商務ビザ）では口座も作れない、と言われる。

行き詰まって携帯のWe Chatペイで生活を試みる。しかし、中国の銀行口座とリンクしない限り、その用途は非常に限られ、しばしば使えない。表向きクレジットカードとリンクする機能はあるが、日本で発行されたカードは、銀聯も含め最後はすべて使用不可の判

定。アリペイもほぼ同様。外国人はまるで犯罪人のよう。

中国は昔からの官僚大国だ。全人代を通過した「国内法」の他、外からはほとんど見えない行政措置が無

限にあり、実際にはそれらも法律と同様の効力を発する。だが、それらを全部守ろうとすれば、まず生活できない。「一带一路」でアフリカ人に多数の商務ビザを発給しながら、銀行での換金も許さないなら、みな地下銀行にもぐれというのか。

奇妙な監視の視線

中国の人たちが「便利な生活」に満足しているのはよく理解できる。しかし、他方で私たち外国人には、中国はどんどん居心地が悪くなっている。5年前に船で入国した際、私は初めて「紙を持っている」という理由でトランクを開けられた。ちょうど漁業問題を研究中で、中韓漁業協定の地図が引かなかった。今年の国慶節のパレード直前、天安門広場を見に行ったら、X線検査で「バッグに本がある」と警戒態勢。紙の何が怖いのか？

すごい精度だと感心したのは、

チベット人の女の子と連絡を取ったとき。その子のお兄さんは難民で、数年前に偶然海外で知り合った。先日、久々にメッセージをくれ、一族で初めて末妹が天津の大学に入ったという。

妹さんと連絡をとりお祝いに行った。ところが、私たちがWe Chatで使ったいくつかの単語、多分「日本」「学者」あたりが、当局の監視の網に引っかかったらしい。その時からアプリの動作がおかしくなり、メッセージがなかなか降りてこない。

この国では、人はどんな「国内法」で捕まるかまったくわからない。もともとの制度が、誰もが必ず何かのルール違反を犯すように設計されている。しかも、時と状況によって実効ルールの幅が恣意的に変わる。そんな体制は法治国家とは呼ばない。

中国よ自信を持って

大国化に伴い、中国は自分と違う価値観を許容する度量を、ますます失っているのでは、と感じる。数年前から大学での講演も事前審査されるようになった。ホスト側が問題のないようにと懇願するので、こちらは最も無難な、つまらない講演タイトルばかり選ぶ。回数は増えたが、それをやる意義はどんどん低下している。

もう中国との学术交流は無理かもしれない、としばしば思う。今、私の所属先はある中国の大学との交流協定を検討中だ。しかし、派遣する教員や学生の安全が守れないなら、日本の組織は許可を出さない。そうした動きが広がれば、中国がどんな経済大国であろうが、自由主義国は中国から距離を置くしかない。つまり次世代の対中交流を担う人材は育たない。すでにカナダはそうなってきた。

中国は発展し、以前よりずっとよい国になった。だからこそ、改革開放の偉大な成果を簡単に捨てて欲しくない、と強く願う。

（益尾知佐子・九州大学比較社会文化研究院准教授）

中国で国内法は守れるのか